



日本フットパス協会会報

Japan Foot Path Association

2010. spring



目次

- ① 会報創刊のご挨拶
- ② 09年度理事会・総会の実施報告【事務局より】
- ③ 特別コラム「日本のフットパス活動への期待と歴史の道」
宮田太郎氏（日本フットパス協会理事、古街道研究家、歴史ルポライター）
- ④ 特集1 活動レポート
北海道黒松内町、勝沼フットパスの会
- ⑤ 特集2 新規加入団体の紹介
かみふらのフットパス愛好会、ふっとぱすをつくる会
- ⑥ 事務局通信



会報創刊のご挨拶

日本フットパス協会会長 町田市市長 石阪丈一

昨年の2月6日に、町田市内での設立総会をもって産声をあげた当協会も、早一年が過ぎました。

会員の皆様には、設立より今日に至るまで多大なるお力添えを賜りましたことを、厚く御礼申し上げます。

皆様が全国各地で活躍している広域団体であるため、なかなか協会として行き届いた支援を行うことができず心苦しい面もございますが、この一年の間にフットパスという言葉が紙面や雑誌

で目にする機会が増加し、また新しい仲間を得ることもできました。当協会が一步一步着実に成果を上げてきていることを確信している次第であります。

今後はよりいっそう一致団結して、フットパスを通じた各々の地域の発展、さらには日本の地域社会全体の活性化に向けて、その役割を果たしてまいりたいと考えております。

皆様の更なるご支援をお願い申し上げまして、創刊のご挨拶とさせていただきます。

トピックス【町田市でフットパス・ロゴ入り道標が製作・設置されました！】

東京都町田市において、協会が所有するフットパス・イメージロゴを使用した道標が、09年度内に製作・設置されました。

当協会では、全国各地のフットパスをこのロゴを目印として繋いでいきたいと考えておりますので、ぜひ今後道標等案内板を製作する際には、同マークをご使用いただければと存じます。

※ロゴの使用方法については、本会報内の事務局通信に詳しく掲載しております。





09 年度理事会・総会の実施報告

(事務局より)



開催日時：2010年2月6日(土) 13:00~13:50
 開催場所：甲州市勝沼市民会館(理事会・交流会)、
 甲州市勝沼防災センター(総会)
 主催：日本フットパス協会 甲州市
 共催：KOSHUかつぬま文化研究所
 勝沼フットパスの会
 甲州市交流まちづくり協議会
 協力：かつぬま朝市会
 塩山コミュニティーマーケットよってけし

2月6日に、協会設立後初めての理事会・総会を、甲州市にて開催いたしました。

本協会は会員様が全国で活躍する広域団体ですが、委任状も含めますと当日は全理事・全会員様のご出席を得ることができました。

ただ、山形県は前日が大雪だったようで、そこからお越しいただいた川西町関係者の方々にはたどり着くまで大変なご苦労があったようです。

また、遠く北海道からも設立時の東京都町田市に引き続き多くの会員様が駆けつけてくださり、本当にフットパス王国北海道の皆様はフットワークが軽く素晴らしいと大変頭が下がりました。

理事会・総会自体も、ホスト役になっていた甲州市関係者様のご尽力により滞りなく進行し、議題についてはすべて異論なく可決されました。(議題内容については後述)



その後フォーラム(詳細については後述)をさせていただいた交流会では、勝沼町で毎月第一日曜日に朝市を開催している「かつぬま朝市会」様の全面協力をいただき、朝市の出店者様が交流会参加者のためだけの特別「夜市」を開催してくださいました。

甲州市特産のワイン・馬肉・野菜等を贅沢に使用した様々な料理に舌鼓を打ちながら、普段は遠く離れた地域でフットパスによるまちづくりに

取り組んでいる同志と語らうことは、会員の皆様にとってなによりの刺激・活力となったのではないのでしょうか。

なお、交流会の中で早くも次回の開催地に北海道黒松内町様が立候補してくださり、その場で正式に決定する運びとなりました。この会員間の活発な交流や結束こそが、この協会の最大の強みであり、まだまだもっとも大事にしていかなければならない部分だとも実感いたしました。



理事会・総会議題

- ・理事会
 - 第1号議案
 - (1)事務局変更(案)の件
 - (2)新規会員加盟(案)の件
 - (3)制定(案)の件
 - 1)日本フットパス協会後援名義規則(案)
 - 2)「フットパス」イメージロゴマークの使用に関する規則(案)
 - 3)日本フットパス協会事務決裁規則(案)
 - 第2号議案
 - 総会への付議事項(案)の件【定款変更について】
- ・総会
 - 第1議案 定款変更の件

フォーラム詳細

開催場所：甲州市勝沼市民会館

第1部 基調講演会

- ・鈴木輝隆氏 江戸川大学教授…
- テーマ：「フットパスと交流まちづくり」

第2部 みんなで語ろう

- ・分科会
 - 1)フットパスとまちづくり
コーディネーター：鈴木輝隆氏
 - 2)スローシティについて語ろう
コーディネーター：手塚 伸氏
(山梨県商工労働部商工企画課総括課長補佐)
 - 3)フットパスを広げるためには
コーディネーター：神谷由紀子氏
(NPO法人みどりのゆび事務局長)

- ・全体会
各分科会ごとのまとめ発表

※7日に記念エクスカージョンも実施いただきました。その模様は協会HPをご覧ください。



日本のフットパス活動への期待と歴史の道

日本フットパス協会理事 古街道研究家 宮田太郎

■全国各地の隅々にまで存在する「歴史古道」と「歴史資源」

およそ人間の営みがあったところであれば、メロンの網目模様のように大小様々な「歴史ある道」が関わり合いながら広がっています。それはまるで人間の体の中の大小血管と同じようなもので、カバーできない所は無いほどに無数に広がっています。様々な出来事や人間ドラマが通った“古道・古街道”は、各地の魅力を伝え教えてくれるものと言えます。フットパス活動では、「現在」「未来」だけを見るのではなく「むかし」をきちっと捉える三元的時間軸の考え方があった方がより豊かなものになるでしょう。

たとえば東日本では歴史の道というとすぐに頭に浮かぶのは中山道や東海道などの江戸五街道ですが、その時代背景はおよそ270年間位のことではないのです。しかし「古街道」というものは縄文ロードから始まる7～8千年間という時代背景を持っています。

また農家が裏山の尾根道や畑に通うような小道も古くなれば“古道”であり、一方“古街道”は地方と地方を結ぶような大きな単位での往還性・往来性があった道を指します。

庶民の生活・生業・信仰の道から、古代国家の国道、鎌倉・室町・江戸幕府の軍用道や政治の道など、様々な道があるからこそ地方は面白く、道に沿った歴史資源が豊富に存在しています。

従来のように「点」で歩き、通過するだけの観光スタイルではなく、人の温もりが通う「線」である古道・古街道を歩くフットパス方式であれば、地域に今も眠る遺跡や史跡の本来の存在意義を発見することもできます。「むかし道」はレコードの溝のようなものであり、訪問する私たちが針となってたどることで遠い過去の記憶や先人たちの心豊かたおやかな暮らしが再生され、身体全体で実感出来るのです。

■ハイスピードで消滅していく歴史資源

一方で極めて危急なる事態が全国で起きています。各地に当たり前に存在したその地域ならではの知識人や郷土史愛好者という世代が高齢化し、後継者不足と、さらには自

治体の合併による弊害が地方に怒涛のように押し寄せています。合併は経済効率優先政策でありますから文化遺産の扱いは後回しとなり、いつの間にか忘れられていくのです。

町の文化財課を訪ねても以前におられた担当者は作りかけの遺跡分布図を残していかへ消え、地域史跡観光散策マップは廃刊、図書資料も散逸、そして遺跡や伝承地が無策なままに破壊され続けており、その問題は想像以上に深刻です。いま正に「日本の歴史の崩壊」が始まっていると言えるでしょう。

さらに「歴史や遺跡のことは、誰か専門家がやっているだろう」という錯覚も蔓延しています。歴史資源や文化遺産は、学者や専門家、文化財関係者などの一部の人のために存在しているのではなく、市民一人一人の財産です。「遺跡」は決して厄介者ではなく、先人・先輩たちが一生懸命に生きた証であり積み上げてきたもの。それを安易に破壊し失うことは自分自身の首を絞めているようなものと現代人は知るべきです。

いまから33年前の昭和53年には文化庁長官から全国の自治体に向けて「道は文化財なので、歴史ある道と町並み、周辺遺跡を保全するように」との「歴史の道調査整備」に関する通達があり、多くの県で歴史古道調査も始まりました。木曽路や熊野古道、飛鳥山辺の道などの江戸時代以前の道も、そうした中で運よく保全・活用へと進みましたが、各地にある市民活動や地域新興活動、民間の活力導入と歴史ツーリズムをうまくかみ合わせられるまでには至りませんでした。

そこで日本らしいフットパスの確立をいま真剣に考え実行していくことで、まったく新しい目的と手法で、眠っていた「歴史資源」を掘り起こす機会が生まれ、歴史ある道を通じての回遊計画や広域連携、市民発掘も含めた遺跡調査、博物館・郷土館の活用ほか様々な地域活性のチャンスが生まれることが期待されるのです。

■歴史フットパス

フットパスは自然を慈しみ、人が永年関わり創ってきた里山や農業環境を楽しみ、文化を学ぶことができる画期的な方法です。さら

に「歴史フットパス」は、他の地域とは異な
った個性や奥深い魅力そのものを、時間の中
で醸成されきたものの中から再発見し、訪問
するたびに深い発見と感動ある体験ができる
大きな力を持っていると考えられます。

全国の津々浦々に——という言葉があるよ
うに、日本は南西諸島やハワイ諸島と何ら変
わらない「島国」です。「海の道と陸の道」の
連続性の中で島の端と端にある湊と湊が結ば
れ、列島を横断する古街道が結節して長い道
のネットワークが構成されていることを再認
識することから始まれば、さらなる広域フッ
トパス連携のヒントが見つかるのではないかと
考えられます。

山の民と海の民の交流の道や、飛鳥・奈良
など古代の都と国内諸国が結ばれた国道や、
九州・北海道、日本海沿岸地域のように外国
と至近距離にあって独自の交易によって育ま
れたグローバルな道もあります。信仰や産業
の道、軍事・政治の道、そして庶民の生業の
道など、様々な歴史ある道が日本の至る所に
眠っています。その上には変わらず「氣」が
通っており、人が集まって流れ、交感し合う
ことができるはずです。またフットパス活動
には次のような取り組みや将来性も考えられ
ることでしょう。

1、感性で体感する“歴史シアター式”フ ットパス

誰にでも分かり易い歴史観があってこそ地
域フットパスは味わいが深まります。郷土
史・地域史をヒントに、知識ではなく感性で
体感できる方式の歴史解説やウォーキング、
大小イベントが行われることでリピーターや
ファンが増えていくに違いありません。古道
を歩く人や高台からかつての歴史景観を想像
し眺めている時の人の目はどこか遠くを懐か
しんでいるかのように細くなり、幸せそうな
表情になるから不思議。次第に右脳の感性分
野が開き、内なるDNAの中に秘められた壮
大な記憶がよみがえり、知らず知らずのうち
に心身が健康になっていく効果もあるのでは
ないでしょうか。



万葉時代防人の道ウォーク（防人祭り*）の風景

※防人祭りは、かつて奈良時代に九州へ向かった防
人たちと家族の別離のシーンを再現し、家族の絆を
現代に問う多摩丘陵での時代再現の祭りです。古代
東海道の遺跡発見がきっかけとなって市民研究者有
志の声で始まり、地域活性に貢献しています。（毎年
秋に開催し、今年で6年目【東京都多摩市】。201
0年は10月31日の予定。）

2、フットパスの仕事と雇用

フットパスには様々な新たな仕事が考えら
れ雇用創出にもつながる可能性が大いにある
かもしれません。地域活性を円滑に運営する
上でこれから必要とされる人材・職種の中
には、システム運営自体に関わる ①フットパ
スプランナー ②各種の講師ガイド（日本語、
外国語）③コーディネーター ④地域コミュ
ニケーターなどが考えられます。実際にフット
パスでは必要性が高まり、地域から求められ
ていく職業ではないでしょうか。コーディネ
ーターは複数エリアを結び交流しフットパス
運営全体に関わり、コミュニケーターは地域
に根差した活動を支援し構築の実質的な手伝
いをします。運営母体がしっかりしてさえい
れば、大学の観光学部の学生ほかの就職先や、
地域で職を探す人に活躍の場があると考えら
れます。

3、地域の歴史をテーマにした 店や拠点を創る

奈良県の奥明日香（石舞台の奥の旧吉野街
道に沿う小さな集落）では女性の天皇・持統
天皇の別名「さらら姫」にちなむ店名で主婦
たちが古民家を改造。地元の野菜でレストラ
ンを経営し新たな観光客を呼んでいます。中
大兄皇子と中臣鎌足が若い頃に南淵請安先生
の元に勉学の為に通った道と旧吉野街道の町
並み、川の中に伝説を元に飛石を置いたり、
棚田があったり、懐かしい村里の演出が行わ
れています。

*古道を歩くフットパス
では、地域の博物館や併
設のレストラン、郷土館、
公民館、農産物作業場、
お寺や神社などをフット
パスオアシスとして活かす
のもいいでしょう。



奥明日香のさらら

*古道の途中に野菜や物産、ウォークマップ、
情報誌などを置き、情報案内もある無人野菜

売り場を少し大きくしたような「むかし道の駅家(うまや)」設置も楽しみが増えるのではないのでしょうか。

■むかし式・道普請(みちぶしん)に学ぶ

全国の自治体での遊歩道整備において、まだ改善した方がいいと思うことがあります。散策道整備の中には、創らなかった方がむしろ歩行やバリアフリーに適していたはずと思われるものが近年とても目立つからです。

「砂利やガラを撒かない・敷かない、石畳を敷かない、舗装しない、階段を造らない、囲わない、遊歩道を造らなければという義務的仕事を創らない」——ことが大切です。砂利を敷いてしまったことでその灰汁(アク)により、周りの苔や地衣類・野草が死滅していくことは明らかであり、また古道沿いの地表にはおよそ土器や遺物が拾える場所が広がっていることが多く、「文化遺産の畑」みたいなものですから、土器の欠片一つ拾えない、土の色の違いも匂いもわからない道に変貌することは土地の価値を大きく下げってしまうのです。よその地方の砂利を敷くなどはもってのほかであり、その「氣」は少なからず荒れ、土地の人気にも知らないうちに反映していきます。

また階段や石畳もよく見られますが、歩く者にとってこれは実に負担が大きく、転倒の危険がつきまとい、返って無い方が安全と思われる場所がとても多く見られるようになってしまいました。公園内の坂道では市民からの苦情や訴えに対処するために階段を造るケースも耳にしますが、実はそれは正反対の対策であり本来の理にかなっていないのです。

さらに日本人は箱根の旧東海道や熊野古道に見られるような石畳道への信仰と愛着が根強いようですが、本来は石が見えないほどに当時は土が上に盛られていたはずであり、メンテナンスが続かなくなった幕末になって石がむき出しとなり、転倒による馬や人の死亡が激増したのです。したがって往来の激しかった中世の街道はこの石敷方式を採用してはいないのです。

滑り易い坂道も、江戸時代までの各地がそうであったように、当時の旅人や通過者は、後を歩く人の難儀を思い、周囲の小枝・葉・

腐葉土を足で寄せたり手で投げ込んでいたのが日常のメンテナンスとなっていたのでした。ほとんどの坂はそれで十分に滑らなくなり、よほどの急な坂でない限り階段は不要とされていたのです。

平坦な道の上にもまで建築廃材や、よその土地の砂利を投げ込むようになったのは、明治・大正・昭和の殖産時代であり、同時にゴミ捨ても増えていったのです。

これからは遊歩道にはお金をかけない分、案内板やマナー板を増やした方が得策なはずです。「むかし式道普請」に学び、温もりのある「道」についてももう一度考えてみることもフットパスには大変必要なことではないでしょうか。



階段は不要！(明らかに歩行者は階段を避けて安全な左側の道のみを使っています。本来は左端の斜面のように、草が生えている場所が最も安全であるように、歩行エリアを区切る場合でも、ある程度自然に任せて草や枝葉があるくらいの方が人間の歩道としては安全、かつ心身にも優しいはずなのです。)



妖精が棲むフットパス「歌才森林公園コース」を新設！！

北海道黒松内町フットパスボランティア 事務局（町企画調整課） 書記 新川 雅幸

概要

北海道黒松内町



黒松内町は、北海道南西部にあり、札幌市と函館市のほぼ中間点に位置し、町の面積のうち76%が森林で、町土のほとんどが丘陵をなし、中央部を2級河川の朱太川が貫流して、これを幹線とした中小河川の流域の平地部に農地を形成しています。



基幹産業は、酪農を主軸とする農業です。

まちづくりから生まれたフットパス



本町は、天然記念物「うたさい自生北限の歌オブナ林」を中心とした豊かな自然環境と牧歌的風景を潜在資源と位置付け、都市の方々を招き入れ交流を図る体験・滞在型のまちづくり「うたさいブナ北限の里づくり」を平成元年本格的にスタートさせ、宿泊施設「歌才自然の家」をはじめとする交流施設の整備、ブナ林を活用した体験イベントの開催のほか、環境と共生した様々なまちづくりを町民とともに進めてきました。

本町がフットパスに取組んだのも、都市との交流による地域活性化を目指す「うたさいブナ北限の里づくり」を推進するため。

「歩く」スローな視点から、田舎の自然や景観の素晴らしさを見つめていただき、満喫してもらうため、イギリスのような「フットパス」を整備することが有効と考え、ボランティアを募集し、平成16年6月「町フットパスボランティア」を組織して、フットパスの取組みを始めました。

現在メンバーは、事務局職員6名を含め27名。リタイアした50歳から70歳代の方がメンバーの大半を占めていますが、前町長を筆頭に、元保育園園長・建築家・登山ガイド・環境雑貨店店主など、人材は多彩です。

平成21年度の主な活動



野山にまだ雪が少し残る5月7日、新緑の中を歩き楽しむため訪れた方々がフットパスを快適に利用できるよう、コース途中のビューポイントや休憩ポイントである農家の

庭先に木製ベンチ9基を設置し、今年度の活動を始動しました。

そして、同月開催した第1回フットパスボランティア会議で、①YouTubeで活動情報を発信する②新規1コースを整備する③イベントを4回開催する④先進地視察研修として英国へ2名、道外へ4名派遣することなど、今年度の目標を決定し、この一年間ボランティアとの協働の下、これらの目標を達成するため積極的に活動してきました。

その中でも、昨年10月新設した本町で4番目となるフットパス「歌才森林公園コース」は、天然記念物「歌オブナ林」の入口に接するルートで、本町では初となる周回コースあり、その利用のしやすさのほかに、カタクリの群落、子どもでも手が届く高さに実を付けるブナの巨木、ウグイスなどの野鳥と出逢えることから、「妖精が棲むコース」といわれる程、高い評価をいただいています。



このほか、安心してフットパスを利用できるための案内看板とバイオトイレの設置、フットパスの拠点施設である駅ホール内の改装とパネル展示、YouTubeでの動画配信に加え、ホームページ【<http://www.kuromatsunai.com/footpath/>】を開設して黒松内フットパスの旬な情報を発信するなど、新たな取組にチャレンジしました。



今後も、ボランティアと力を合わせ、黒松内流のフットパス活動を展開していきます。

来年度の総会&フォーラムの御案内



今年10月16~17日の両日、本町で開催する当協会のH22年度総会&フォーラムでは、本町オリジナルの「自然」「景観」「食」「交流」を堪能していただくとともに、北海道各地の特色を活かしたフットパスを歩き楽しんでいただけるよう準備を進めてまいりますので、是非、御参加ください。

人をつなぎ、心をつなぐ フットパス

勝沼フットパスの会事務局 三森哲也

■葡萄の里の寺町ツアーを開催

澄み切った青空に、南アルプスの白い山並みが鮮やかなコントラストを描く晩秋、昨年11月29日(日)に本会が主催する勝沼フットパスツアーが開かれました。今回は、寺町を巡るツアーで、昼食には郷土食のほうとうが振舞われ、門前市も出現しました。

甲州市勝沼町は、甲府盆地の東の玄関口にあり、古くから交通の要衝として栄えました。江戸時代には甲州街道の宿場が置かれ、行き交う旅人で賑わいました。江戸中期の学者である荻生徂徠の紀行文に「勝沼の宿は人家多く繁昌なる所、甲州街道では第一番也(原漢文)」と勝沼宿の賑わい振りが描写されています。

寺町は甲州街道から北へ入った一角にあり、飛鳥時代に創建された等々力山万福寺を中心に11の寺院が軒を連ねています。農村部にある寺町は全国的にも珍しく、葡萄畑に囲まれて建つ寺院の景観は、勝沼ならではの風情を醸し出しています。

■104人が参加、会員がガイド役

ツアーは参加費1,000円で、県内外から申し込みのあった104人のかたが参加しました。4班に分かれ、会員がガイド役を務めました。集合地点は葡萄橋(全国でここにしかない名称)の脇にあるワイナリーの広場です。毎月第一日曜日に朝市の会場となる場所です。

一行は朝9時半にスタート、官軍兵士の墓や勝沼最古(ということは日本最古)の甲州葡萄の木を見ながら、甲州街道を下り、蔵を利用した早川家の私設資料館を見学、諏訪神社境内を通り抜け、寺町に入りました。

■熱々の“ほうとう”に舌鼓

寺町は東地区9カ寺と西地区2カ寺に分かれています。元は万福寺の参道沿いにあった寺院群ですが、鎌倉時代に浄土真宗に改宗していたため、江戸時代、京都の本願寺が東西に分立した際に、東本願寺派の9カ寺がそろって東側に移り、2地区に分かれたという歴史があります。そんな話を市民ガイドから聞きながら、石畳の道をゆっくりと歩きました。古楽器や動物、植物をあしらった透かし彫りがほどこされた山門やお堂、花木が植えられた庭園、軒先まで葡萄棚が架けられた寺院など、地元の人も知らなかった寺町の魅力が浮かび上がってきます。

ゴールの万福寺境内では、朝市会の女性たちが丹精こめた熱々のほうとうに参加者は舌鼓を打ちました。もちろんワインと葡萄のサービス付です。山門前には朝市出店者の皆さんが手作りクッキーやジャム、工芸品などのお店を出し、催しに彩りを添えてくれました。



会員の案内で寺町を巡る参加者の皆さん

■事前研修でこの日に備える

会員ガイドは皆、素人のため、事前に研修ツアーを行い、この日に備えました。会員も案内する側になると、勉強しなければならないため、知識の習得に積極的になります。必然的に地域に対する愛着や誇りが以前よりも増していきます。個人にとっても、地域にとっても大きな収穫になることは間違いありません。現在、本会のメンバーは24人。職業や性別、年代も様々ですが、皆この勝沼が好きだという点は共通しています。面白いのは半数以上が、町外や県外の出身者ということです。誘われて一緒に歩いているうちに、フットパスの魅力にとりつかれ、益々この土地が好きになっていきます。フットパスは、理屈ではなく感性に訴える不思議な“魔力”を持っているように感じます。単なる歩く道ではなく、人をつなぎ、心をつなぐ道だと思います。

■定期的にガイドツアー開催へ

会が発足してまだ3年ほどですが、会議の出席率も高く、イベント後の反省会も、持ち寄りのワインや手作り料理で盛り上がります。今年からは毎月、朝市会場を起点にしたガイドツアーを定期的に開催していきたいと意気込んでいます。宿場町という土地柄からくる、旅人に寛容であり、進取の気性に富むという“勝沼気質”を活かして、自分たちも楽しみながら、これからも活動していきたいと考えています。



パノラマ絶景の町

かみふらの

かみふらのフットパス愛好会 会長 佐川泰正

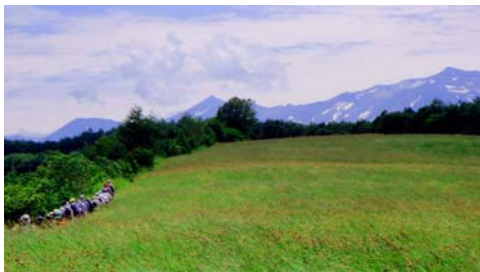


日本フットパス協会設立おめでとうございます。会報第1号にかみふらのフットパスを紹介させていただき、本当にありがたく存じます。

平成19年末エコ・ネットワーク代表小川巖先生にフットパスについてのご講演を上富良野町で開催していただく機会を得、それ以来富良野地方にフットパス熱が急激に高まりました。今ではフットパスという言葉が定着しつつあり、最初は10名程度で始めた愛好会でしたが、地元はもとより各地のフットパス行事に参加していくうちに、今では100人以上のフットパスファンがいます。

上富良野町は北海道のほぼ中央にある町で、富良野盆地の北側に位置し、三方が連山に囲まれ一方が田園平地となっておりイギリスの田園風景とよく似ている景観を持っている所です。何と言っても丘の上から眺めるパノラマ絶景は年中四季の変化があり、言葉では言い尽くせないだけの美景と画趣に心が奪われ、歩いている時間を忘れるくらいの情趣と感動があると言っても過言ではありません。

おかげ様で8月末「第11回全道フットパスの集い」が私達の町で開催される運びとなり、2日間で延400人もの方がかみふらのフットパスに参加していただき、多くの方から喜びや感動の声を拝受致しました。私達はあくまでもボランティアとして活動しており、まだまだ十分とは言えませんが、おもてなしの心でお迎えする準備だけは整えておこうと思います。



フラワーランドパス

現在私達は11コースを設定しておりますが、全てのコースが町の中心から15分程度で出発点に行く事が出来ます。田舎ならではの福運と思います。かみふらのフットパスの特徴は何と言っても壮大な景色の中を歩く事により、自然との交感出来る事だと思います。地形の変化がほどよく自分と同調し、山も森も樹も草も、川も風も小鳥たちも、私達と一緒に歩いている様な気持ちになってくるのです。山間部から平地へ流れる川は富良野川、ベベルイ川、ヌッカクシ富良野川等20程あり、東の秀峰十勝岳連邦は四季折々に美しい変化を見せてくれる名峰であります。

ほとんどのコースは土の路を歩くよう努めており、その路傍にはフクジュソウ、フキ、エゾエンゴサク、エンレイソウ等の草花がミズナラや白樺、トドマツ、カラマツ等と仲良く暮らしております。冬には今から150年ほど前に松浦武四郎が通過した足取りを辿って雪の上を歩くかんじきウォークを毎年実施しております。

フットパスをする事により多くの事を学びます。道の繋がりは人との繋がりでもあります。今、私達愛好会は170kmくらいを歩くロングトレイルを計画中です。富良野地方へお越しの際は、かみふらのフットパスを味わってみてください。日本フットパス協会のご隆盛を心からお祈り申し上げます。



和田草原とどんぐりの郷パス

昔の道を蘇らせ、 地域の魅力を発信、歩いてもらおう

ふっとばすをつくる会 代表 高木恵美子



★昔の道を蘇らせよう！

山梨県北杜市大泉町は、八ヶ岳南麓に広がる森や湧水に恵まれ、縄文の昔から人が住んでいたところで、ここには、美しい自然の魅力にひかれて都会から通ううちに住み着く人も増えてきています。

森を歩くと、一昔前まで薪とりや草刈りに通ったであろう道が、そこかしこに埋もれています。これらの道を少しだけお掃除して蘇らせることができれば、本場のフットパスにも劣らない素晴らしい散歩道ができるのではないかという思いの人たちが集り、この会を立ち上げました。

まず私達は、わずか1キロほどですが、県の許可を得て県有林の中の埋もれた赤道（あかみち）の倒木を片づけ歩けるようにしました。その結果、人が語りながら、鳥の声を聞きながら歩ける散歩道ができ、近所の人を楽しんで通ってくれるようになりました。



これが、私達「ふっとばすをつくる会」の「はじめの一歩」です。

★地域の魅力を発信し、歩いてもらおう！

大泉には、開拓の時代から代々森や畑を守り、固有の文化を築いている人達があります。今も古民家の家並みが残り、道祖神や馬頭観音などの石像もたくさんあります。しかも、雄大な八ヶ岳や南アルプスの山々、富士山などを見ながら歩ける魅力的な道も大変多いのです。ですが、以前から住んでいる人の中には、見慣れてしまったために、この地の景観

の素晴らしさを意識していない人もいます。

そこで私達は、地域の魅力を見直してもらい、歩いてもらうためのガイドマップ作りの活動も始めました。

1. 昔からあった道を生かし、蘇らせ、楽しく歩ける道をつくろう
2. 自然との調和と自然との共存を考え、自然を守ろう
3. 仲間と楽しく交流しよう
4. 活動を通して地域の連帯を深めよう

この4つを合言葉に、「その地図があれば自分で歩くことができ、歩く人自身に大泉町の魅力を発見してもらえる」というようなガイドマップを目指して作業を進めています。

現在、会員を3つのチームに分け、設定したコースを何度も歩いて話し合いを重ね、地図を作っています。歩く度に、こんなにも素晴らしい大泉町の魅力を、もっともっとたくさんの人達に知ってもらいたいとの思いを強めています。

★私たちの夢！

私たちは、みどりのゆびや勝沼フットパスなど、近隣の先進団体の活動も見学し、学ばせていただいています。そしてこのようなフットパスが日本のあちこちにでき、「どこに行ってもガイドマップを片手に歩けば道に迷うこともなく、その地域の魅力を思う存分楽しむことができる」という文化が日本中に広がる・・・これが私達の夢です。日本フットパス協会の一員として会の皆様から学びつつ前進し、少しでも成果として発信できるようにと願っています。





事務局のご紹介

09年9月1日より、協会事務局が、NPO法人みどりのゆび様より、町田市観光コンベンション協会に変更（日本フットパス協会より業務委託）になりました。

住所：〒194-0013 東京都町田市原町田3-3-22

町田商工会議所2階 町田市観光コンベンション協会内

TEL. 042-732-3056

FAX. 042-724-1952

E-mail: info@machida-guide.or.jp

事務局長：徳尾和彦

事務次長：宮崎修治

トピックス【町田市観光コンベンション協会とは？】

町田市観光コンベンション協会は、町田市における観光振興の中核的役割を担っていく組織として、2009年4月に設立されました。まだ設立初年度ということもあり、2010年3月現在で事務職員は総数でわずか3名しかいません!!

その中で市の観光施策から日本フットパス協会の事務局まで受け持っているの、本当にあわただしい毎日を送っております。

なにぶん始めて尽くして至らない部分もあろうかとは存じますが、4月より増員予定でもありますし、一步一步着実に業務を遂行してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

協会の主な取り組み

2009年

- ・2月7日 設立総会・記念シンポジウムを町田市文化交流センターで開催
- ・2月8日 設立記念エクスカージョンを町田市内で開催
- ・3月16日 協会HPを開設
- ・6月4日 行方市観光協会様、ふっとばすをつくる会様が協会に加入
- ・8月26日 (有)EUCサポート様が協会に加入
- ・9月1日 町田市観光コンベンション協会に事務局移行
- ・9月7日 かみふらのフットパス愛好会様が協会に加入
- ・9月10日 「フットパス」イメージロゴマークの使用に関する規則・後援名義規則の制定
- ・10月22日 事務決裁規則の制定

2010年

- ・2月6日 理事会・総会・フォーラムを甲州市勝沼市民会館で開催
- ・2月7日 かつぬまフットパスウォークを甲州市内で開催

視察対応

山梨県甲府市、青森県八戸市、千葉県柏市、静岡県島田市 他

取材対応

- ・8月19日 ラジオ局「KBS 京都」、番組名「笑福亭昇瓶のほっかほかラジオ」、コーナー名「ほっかほか 嘶の朝ごはん」
- ・8月27日 新聞名「朝日新聞夕刊」、記事「フットパスでゆったり観光」
- ・10月10日 雑誌名「BE-PAL11月号」、コーナー名「元気な田舎」
- ・10月14日 ラジオ局「J-WAVE 81.3FM」、番組名「RENDEZ-VOUS」、コーナー名「TOMORROWLAND FIND TOMORROW」
- ・10月20日 冊子名「観光とまちづくり」、コーナー名「ツーリズム・ニュー」 他

※視察・取材対応に際しては、NPO法人みどりのゆび様に多大なるご協力をいただいております。

協会 HP 運営へのご協力のお願い

HP管理は事務局が担当しています。

09年3月より協会HP(<http://www.japan-footpath.jp/>)が開設されています。更新・改編は事務局が担当していますので、HP関連でご意見等ございましたら「事務局長 徳尾」までご連絡ください。

事務局宛にイベント情報をお寄せください！

HP内に「イベントカレンダー」コーナーが設置されておりますので、そちらに掲載させていただきます。(少しでもフットパスに係るものであれば、どのような小さなイベントでもかまいませんので、HP充実のためぜひお教えください。)

※情報送付方法…「イベント名」「イベント内容」「開催日時・開催場所」「定員・費用・申し込み方法」「主催」が分かるデータを添付したメールを、協会事務局長 徳尾 (info@machida-guide.or.jp) までご送付ください。【随時受付】

自地域のフットパスを紹介してください！

HP内に「各地域のフットパス」コーナーが設置されておりますので、そちらに掲載させていただきます。【黒松内町・長井市・町田市は作成済み(HPで公開中)】

※情報送付方法…「自地域のフットパスを紹介する文書・写真データ(分量等はすでにHPに掲載済みの3市のものをご参照ください。)」を添付したメールを、協会事務局長 徳尾 (info@machida-guide.or.jp) までご送付ください。【随時受付】

その他お知らせ

「フットパス・イメージロゴ」「協会の後援名義」をご使用ください！

「フットパス」イメージロゴマークの使用に関する規則¹⁾ならびに「日本フットパス協会後援名義規則²⁾」が施行されておりますので、ぜひご活用ください。特にロゴマークについては、会員様は申請書等の提出も必要ありませんので、積極的に様々な機会でお使いください。(画像データについては事務局が所有しております。必要がありましたらお気軽にご連絡ください。)

フットパス・イメージロゴ



製作趣旨

足跡とPの文字をモチーフに擬人化。親指の色は太陽をイメージして、赤に。その他は春夏秋冬を。目が前を見ていないのは歩きながら色々なものに目を留めているから。

○新規会員募集にご協力ください！

協会では常時新規会員を募集しております。ぜひお知り合いの団体様等を誘ってみてください。また、会員様のフットパス活動に対し取材・視察があった際にも、ぜひ当協会の存在を宣伝していただけると大変ありがたいです。

●会員種別および年会費

【正会員】

- 1.自治体会員： 50,000 円/年
協会の目的に賛同し、その事業に協力するために入会した自治体
- 2.団体会員： 10,000 円/年
協会の目的に賛同し、その事業に協力するために入会した団体

【賛助会員】

- 1 □ 5,000 円/年（1 □より可）
協会の目的に賛同し、その事業を賛助するために入会した個人・団体

●会員特典

【正会員】

- 貴団体のフットパス活動の活性化のバックアップをいたします。
- ・フットパスによるまちづくりのノウハウ（ルート開発、フットパス整備（道標を含む）、フットパスツアー企画、シンポジウム開催、地元おもてなし組織立ち上げ、ガイドマップ作成等）提供
- ・貴団体の活動情報・イベント情報の協会 HP・会報等での紹介
- ・協会を通じた会員間の連携事業の開発・実施 等

【賛助会員】

- ・協会の会報発送
- ・HP への貴社名の表示、相互リンク 等



製作・発行 日本フットパス協会事務局

TEL : 042-732-3056

FAX : 042-724-1952

E-mail : info@machida-guide.or.jp

HP : <http://www.japan-footpath.jp/>